OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とキルギス語の自動詞、他動詞における語彙化に関する一考察
Author(s)	シャミシエワ, ナズグリ
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 122-132
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語とキルギス語の自動詞、他動詞における語彙化に関する一考察

シャミシエワ　ナズグリ

1. はじめに

本稿は日本語とキルギス語[1]の自動詞、他動詞(以下、自、他)における語彙化について考察したものである。Brinton and Traugott (2005 : 1)では、以下のような文が挙げられている：

We are celebrating a fascinating holiday today.
今日は、すてきな休日をお祝いしているところです。

上の例の celebrating と fascinating は、-ing が付き、同じ文法形式のように見えるが、それぞれ異なる歴史をたどっていることが述べられている。つまり、前者は文法形式のまま残り、後者は語彙的になったということである。確かに、celebrating と fascinating は元の動詞が celebrate (祝う、祝賀する)、 fascinate (〈人を〉魅惑する、…の興味をそそる)であるはずだが、-ing が付いた後、前者の celebrating (祝っているところ)は、形式上も、意味上も文法的になっており、後者の fascinating (魅惑的な、美しい)は、語彙的になっていると考えられる。

さらに、影山(1993)は、「春風」、「入学する」、「腹黒い」などは、「春に吹く風→春風」、「学校に入る→入学する」、「(彼は)腹が黒い→腹黒い」のようにそれぞれ元の統語的な意味を持っているが、複合語になると、その語の意味が慣習化されたり、特殊化されたりしてしまうと述べている。

以上に挙げた、英語の fascinating や日本語の複合動詞「春風」、「入学する」、「腹黒い」のような語彙化の現象が日本語とキルギス語の自動詞や他動詞の派生にも存在すると思われる。すなわち、形式上、受身(キルギス語の場合、再帰も)や使役の接辞が付き、文法的な規則で派生した自動詞や他動詞であるが、意味の面から見ると、派生動詞ではなく単独の語彙としてレキシコンに登録されている自動詞や他動詞が存在すると考えられる。

形式上でも意味上でも文法形式に沿った派生動詞を「文法的な自、他」、意味が特殊化したものを「語彙的な自、他」と呼ぶとすると、さらに、日本語とキルギス語の派生動詞には、見方によって文法的にも語彙的にも捉えられるものがあると思われる。それは、「日本語とキルギス語の文法的な自、他において、文法的な面と語彙的な面のどちらも同時に存在する場合がある」というものである。このことによって、文法と語彙が連続性を持つものであり、「これは文法的な自、他、これは語彙的な自、他」のようにはっきりと線を引くことはできないということが言える。

2. 文法的な自動詞、他動詞とは何か

		〈自動詞〉	〈他動詞〉
(1)	形態的に対応するペアのある自、他	開く 壊れる 回る	開ける 壊す 回す
(2)	形態的に対応するペアのない自動詞	歩く、走る、死ぬ等	自動詞＋(さ)せる 歩かせる、走らせる、死なせる
(3)	形態的に対応するペアのない他動詞	他動詞＋(ら)れる 書かれる、読まれる、作られる	書く、読む、作る等
(4)	両用動詞	開く(ひらく) 閉じる	

〈表 1　日本語の自、他〉(寺村(1982)を参考に作図)

日本語には、(1)のような形態的に対応する自、他が数多くある。一方、(2)のような対応する相手を持たない自動詞もあり、同じく(3)のような対応する相手を持たない他動詞も多い。さらに、(4)のように一つの形が自動詞としても、他動詞としても使えるものがある。

(2)の対応する他動詞のない自動詞「歩く」に対して、使役接辞の「(さ)せる」が付いた、「歩かせる」が他動詞相当の機能を持ち、対応する自動詞のない他動詞「書く」に対して、受身接辞の「(ら)れる」が付いた、「書かれる」が自動詞相当の機能を持つ。

	〈自動詞〉	〈他動詞〉
(1)	他動詞＋“-il”,“-in”(受身・再帰接辞)＝自動詞	“oku-”　「読む」 “ič-”　「飲む」 “karma-”　「持つ」 “kiy-”　「着る」
(2)	“otur-”　「座る」 “tur-”　「立つ」 “kül-”　「笑う」 “ket-”　「行く」	自動詞＋“-t” ,“-tir”, “-ar”, “-ïz”(使役接辞)＝他動詞

〈表 2　キルギス語の自、他〉

キルギス語には、自動詞(ötpös ètiš)と他動詞(ötmö ètiš)が存在するが、日本語のような

対応するペアのある動詞が存在しない。自動詞と他動詞の対応するペアがないため、自動詞に使役(arkïluu mamile) の接辞“-t” ,“-tir”, “-ar”, “-ïz”、他動詞に受身(tuyuk mamile)と再帰(özdük mamile)の接辞 “-ïl”,“-ïn”、が付着することによって、自動詞から他動詞相当のもの、他動詞から自動詞相当のものが成立する。（**〈表 2〉** を参照）

本稿で扱われている「文法的な自、他」と言ったものが、**〈表 1〉** と **〈表 2〉** の黒枠で囲ってある部分、使役接辞や受身接辞(キルギス語の場合、再帰も含まれる)が付着することによって成立した自、他のことである。

3. 語彙化とは

Brinton and Traugott(2005)では、「語彙化」は、①「語彙目録に採用すること」、②「語が文法規則によって説明できなくなること」、③「示唆的意味からコード化された(慣習化した)意味への変化」、④「大きな範疇と結びついた具体的な意味の発展」、⑤「意味変化一般」を指すことが述べられている。影山(1993)は、「春風」、「入学する」、「腹黒い」のようにそれぞれ元の統語的な意味を持っているが、複合語になると、その語の意味が慣習化されたり、特殊化されたりしてしまう。その語を辞書に登録することを「語彙化(lexicalization)」と呼んでいる。語彙化とは、大石(1988)では、複合の意味がその構成要素から直接引き出されないことを指している。

以上のように「語彙化」について研究が様々行われているが、その多くは主に複合語に基づいた語彙化の研究である。

以下、語彙化している自動詞、他動詞とはどんなものか、それは、どのような基準で語彙化していると言えるのか、詳しく見ていく。

4. 自動詞、他動詞の観点から見た語彙化

4.1. 日本語の語彙化している自動詞、他動詞

日本語で使役や受身の接辞が付き、形式的に文法的な自、他であるが、語彙化されていると思われる自、他を以下のように 5 つのタイプに分ける。

4.1.1. 第一タイプ

着せる

1a) 子供に服を着せる。

1b) 子供に服を着させる。

見せる

2a) 友達に写真を見せる。

2b) 友達に写真を見させる。

被せる
3a)　弟に帽子を被せる。
3b)　弟に帽子を被らせる。
浴びせる
4a)　熱湯を浴びせる。
4b)　熱湯を浴びさせる。

「着る－着せる」「見る－見せる」「被る－被せる」「浴びる－浴びせる」の場合、一見、対応しているようにも見えるが、「着る」「見る」「被る」「浴びる」は通常、他動詞で、さらに、「着せる」「見せる」「被せる」「浴びせる」も他動詞だと考えられる。これらに対しては、「着させる」「見させる」「被らせる」「浴びさせる」という使役の表現もある。したがって、「着せる」「見せる」「被せる」「浴びせる」は「着る」「見る」「被る」「浴びる」と対応であるというよりもそれぞれ単独の語彙であると見なしやすい。

4.1.2.　第二タイプ

とばす
5a)　子供が模型飛行機をとばす。
5b)　縄跳びの練習で子供をとばせる。
済ます
6a)　食事を済ます。
6b)　食事を済ませる。

「とばす」「済ます」に関しては、語幹に「(さ)せる」を付けて使役形にもできる場合と、「とばす」「済ます」のように「使役形の短縮形」としても使われる場合がある。さらに、「とぶ」に対しては、とぶのが「もの」なら「とばす」のみ使われ、「とぶ」のが「人」なら「とばせる」も使われる。「済ます」は、6a)の文の意味以外に、「問題を金で済ます」「お昼はそばで済ます」のような用法もある。第一タイプとは、「着る」「見る」「被る」「浴びる」が他動詞であるのに対し、「とぶ」「済む」が自動詞である点で異なる。

4.1.3.　第三タイプ

知る-知らせる
7a)　ニュースで事件を知る。
7b)　ニュースで事件を知らせる。

聞く-聞かせる

8a)　話を聞く。

8b)　とんだ長話を聞かせてしまった。

7b)と 8b)の「知らせる」と「聞かせる」は、形態的に「知る」、「聞く」に使役接辞の「(さ)せる」が付いている点で、文法的な他動詞(＝使役形)だと言えるが、他動詞的な面もあると思われる。「知らせる」は意味的に「伝える、連絡する、報じる、告げる」という意味で用いられ、また、「聞かせる」は「話す、教える、言う、(話を)する」という意味で用いられることからも、「知らせる」と「聞かせる」は語彙的な他動詞としても見なしやすい。

さらに、早津(1998)は、「知らせる」「聞かせる」が語彙的な他動詞であると言える要因を以下のようにまとめている。

- 「人に知らせる」、「人に聞かせる」のように「ニ格」で表されるだけでなく、人や場所的な名詞の「へ格」や、「人まで知らせる」のように「マデ格」で表されることがある。
- 文法的な他動詞は一般に「お～する」「お～申し上げる」と表現しにくいが、「知らせる」と「聞かせる」の場合、それが成り立つ。
- 複合動詞として、「告げ知らせる」があるが、これには「*告げ知る」という形がない。「聞かせる」にも「語り聞かせる(*語り聞く)」などの複合動詞があり、いずれも対応する元の動詞がない。したがって、「告げ知らせる」は「*告げ知る」から、「語り聞かせる」は「*語り聞く」から派生したものではなく、「告げる」と「知らせる」、「語る」と「聞かせる」が複合したものだと考えられる。

4.1.4.　第四タイプ

産む-産まれる

9a) お母さんが赤ちゃんを産んだ。

9b) *赤ちゃんがお母さんに／によって産まれた。

9c) 赤ちゃんが産まれた。

「産まれる」という動詞は、一見、「産む」という動詞の「受身」のように見えるが、通常、受身形とは見なされない。もし、「産まれる」が受身であれば、「お母さんが赤ちゃんを産んだ」のように、そのもとの動詞として「産む」が挙げられるだろう。さらに、「産まれる」という動詞が「産む」という動詞の受身であると考えれば、普通、直接対応する能動文を作れるはずだが、9b)のような文は成立しない。

4.1.5. 第五タイプ

最後のタイプは「慣用的な表現に用いられる文法的な自、他」である。以下の 10)〜29)の「飲まれる」「釣られる」「駆られる」「飽かせる」「利かせる」「咲かせる」「吹かせる」「まかせる」「沸かせる」「泳がせる」「寝かせる」「騒がせる」「揺られる」「気取られる」「食べさせる」「言わせる」は形式上受身や使役の接辞が付き、文法的な自、他であるが、元の意味を失って、慣用的な表現として使われる自、他であると考えられる。例えば、「飲まれる」は、「飲み物を飲む」「飲み物が飲まれる」という意味以外に、10)の文のように、「相手や雰囲気に圧倒される」という意味でも使われる。

10) 相手の気迫に飲まれる。	11)安さに釣られてディスカウントストアで一万円も使ってしまった。
12) 好奇心に駆られて部屋に入った。	13) 金に飽かせて建てた豪邸。
14) 顔を利かせて特別に配慮してもらう。	15) 気を利かせて準備しておく。
16) 引退前にもう一花咲かせたい。	17) 思い出話に花を咲かせる。
18) 新製品を開発して大手企業に一泡吹かせる。	19) 足にまかせて歩く。
20) シーツにのりを利かせる。	21) バンドの熱演がファンを沸かせる。
22) バランスを失い、体を泳がせる。	23) パンの生地を寝かせる。
24) 世間を騒がせた事件。	25) 波に揺られる小舟。
26) 思惑を気取られる。	27) 話に気を取られてあやうく乗り越すところだった。
28) 金にものを言わせる。	29) 家族を食べさせる。

4.2. キルギス語の語彙化している自動詞、他動詞

キルギス語の語彙化していると思われる自、他を以下のように形態的な基準・意味的な基準・統語的な基準から説明する。

4.2.1. 形態的な基準から分析

➢ **語根が単独で用いられることがない語彙的な自、他**

30) oygo**n** (起きる)

Al	katuu	čïk-kan	ün-dön	čoču-p	oygo**n**-du.
彼(彼女)	大きい	出る-PAST	音-ABL	驚く-CV	起きる-PAST

彼(彼女)は大きな音で驚いて起きた。

31) oygo**t**　(起こす)

Tün　ortosun-da　katuu　kïykïrïk　an-ï　oygo**t**-tu.

夜　中-LOC　大きな　叫び声　彼(彼女)-ACC　起こす-PAST

夜中に大きな叫び声が彼(彼女)を起こした。

30)の「“oygo**n**”－起きる」という動詞には再帰接辞の“**-n**”、31)の「“oygo**t**”－起こす」の動詞には使役接辞の“**-t**”が付いている。これらの動詞には形態的に再帰接辞や使役接辞が付いているため、一見、文法的な自、他のように見える。しかし、語根の“oygo-”は、再帰接辞の“**-n**”、使役接辞の“**-t**”とともに形態的に化石化してしまい、語根と接尾辞に分けることができないと考えられる。もし、仮に分けるとしても、語根が語彙としての意味を表さない。したがって、30)と 31)の動詞は再帰接辞や使役接辞が付き、文法的な自、他であるのにも関わらず、単独の語彙的な自、他であると見なしやすい。

- **形式上文法的な他動詞が「対格」で表示される場合**

32) öl-**tür**　(死なせる／殺す)

Ali　adam-dï　öl-**tür**-dü

人名　人-ACC　死ぬ- CAUS-PAST

アリは人を殺した。

33) öl-**tür**-**t**　(死なせるようにさせる／殺させる)

Ali　Asan-ga　adam-dï　öl-**tür**-**t**-tü

人名　人名-DAT　人-ACC　死ぬ- CAUS-CAUS-PAST

アリはアサンに人を殺させた。

32)の「“öl-**tür**”－死なせる(殺す)」は、「“öl-”－死ぬ」という自動詞に使役接辞の“**tür**-”が付き、文法的な他動詞のように見える。しかし、「“öl-**tür**”－死なせる(殺す)」の場合は、被使役者が「対格」で表示される目的語として現れている。それに対して、33)の「“öl-**tür**-**t**”－死なせるようにさせる(殺させる)」の場合には、さらに、使役接辞の“**-t**”が付き、被使役者である Asan を「与格」で表示する。その他に、「“öl-**tür**”－死なせる(殺す)」は 34)のような用法でも使われる。

34) Otpuske-m-din　on　kün-ün　öl-**tür**-dü

休暇-1-GEN　十　日-ACC　死ぬ- CAUS-PAST

私の休暇の十日間を無駄にした。(殺した)

したがって、「“öl-**tür**”－死なせる(殺す)」は語彙的な他動詞であると考えられる。

4.2.2. 意味的な基準から分析

➢ **接辞付着前と接辞付着後の意味変化**

35) jet- (追いかける)

Al Asan-dïn artï-nan jet-ip bar-dï.

彼 人名-GEN 後ろ- ABL 追いかける-CV 行く-PAST

彼はアサンの後ろから追いかけてきた。

36) jet-**il** (成長する)

Asan 18ge čïg-ïp, čoŋ jigit bol-up, jet-**il**-di.

人名 18-DAT なる- CV 大きい 男 なる-CV 成長-PAST

アサンは 18 歳の大きい男子になって、成長した。

35)の「"jet-"ー追いかける」という動詞は"-**il**"の受身接辞が付くことによって、元の語幹が表す動詞の意味が 36)「"jet-**il**"ー成長する」のように変わる。つまり、接辞付着前と接辞付着後の意味がそれぞれ違うと考えられる。これは、受身接辞が付いたことで一つの単独の語彙が成立したと言える。

4.2.3. 統語的な基準から分析

➢ **意志性の"-ïŋïz"ー「〜よう／〜しよう／〜てください」を付加できるか**

意志性の意味を表す"-ïŋïz"ー「〜よう／〜しよう／〜てください」が付くか付かないかによってもその動詞が語彙的であるか、あるいは文法的な自動詞なのかも明らかにすることができる。

37)「"makta-**l**"ー褒められる」、 38)「"jyina-**l**"ー片づけられる」は、形式上、それぞれ"-**l**"の受身接辞が付加し、文法的な自動詞であると考えられる。しかし、意志性の"-ïŋïz"ー「〜よう／〜しよう／〜てください」を付加すると、37)が非文となり、38)は文法的に正しい文となる。このことからも、37)「"makta-**l**"ー褒められる」は文法的な自動詞、38)「"jyina-**l**"ー片づけられる」は語彙的な自動詞であると思われる。

37)*makta-**l**+ïŋïz (褒められるようにしてください)

*Asan bügün mektep-te makta-**l**-ïŋïz.

人名 今日 学校- LOC 褒める-PASS-ようにしてください

アサン今日学校で褒められるようにしてください。

38) jyina-**l**+ïŋïz　(片づけられるようにしてください)

Konok-tor-dun　kel-ish-i-ne　karata　jyina-**l**-ïŋïz

お客さん- PL-GEN　来る-PL- ACC- DAT　ため　片づける-PASS-ようにしてください

お客さんたちが来るため片づけるようにしてください。

➢ **“-dan/-taraptan”－「～に／～によって」とともに使えるか**

また、「“buz-**ul**”－壊れる」という受身接辞が付いた自動詞は、“-dan/-taraptan”－「～に／～によって」とともに使えるかどうかで、その語が文法的な自、他であるか、語彙的な自、他であるかが判定可能である。

以下の 40)の「“buz-**ul**”－壊れる」は、「産まれる」と同類であると考えられる。つまり、40)の文は、「*赤ちゃんがお母さんに／によって産まれた」と同じように非文になると考えられる。このことから、「“buz-**ul**”－壊れる」は、語彙的な自動詞だと見なしやすい。

39) Asan　saat-ti　buz-du.

人名　時計- ACC　壊す-PAST

アサンは時計を壊した。

40) *Saat,　Asan　dan/taraptan　buz-**ul**-du.

時計　人名　に／によって　壊す-PASS-PAST

時計はアサンに／によって壊された。

41) Saat　buz-**ul**-du

時計　壊す-PASS-PAST

時計が壊された。

5. おわりに

以上、本稿で扱われている、文法的な自、他というのはどんなものか、語彙化とは何か概観したうえで、日本語で語彙化していると思われる自、他を 5 つのタイプに分け、分析を行った。さらに、キルギス語の語彙化している自、他を形態的・意味的・統語的な基準から分類し、分析をした。その結果、両言語の自、他の中で、形式上、派生動詞であるのにも関わらず単独の語彙としてレキシコンに登録されている動詞があることが分かった。具体的には、日本語の「着せる」「見せる」「被せる」「浴びせる」「とばす」「知らせる」「聞かせる」「産まれる」などとキルギス語の “oygo**n**” (起きる)、“oygo**t**” (起こす)、“öl-**tür**” (死なせる／殺す)、 “jet-**il**” (成長する)などの文法的な自、他において、英語の fascinating と日本語の複合語のような語彙化の現象が存在するということである。最終的に、自、他

において文法と語彙が連続性を持つものであり、「これは文法的な自、他、これは語彙的な自､他」のようにはっきりと線を引くことはできないということを主張することができる。

【参考文献】

今井忍(2003)「日本語の生産的使役と語彙的使役の連続性について:認知文法による分析に向けて」『京都大学言語学研究』22：119-135

大石強(1988)『形態論』開拓社

大崎紀子(2012)「チュルク語動詞受動形の受動以外の用法についてーキルギス語類義語動詞の意味用法の比較からー」『チュルク諸語研究のスコープ』　大阪大学世界言語センター「地政学的研究」プロジェクト

奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞の対応―」『動詞の自他』ひつじ書房　57-81

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版

栗林裕(2009)『チュルク語南西グループの構造と記述』九州大学

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

野田尚史(1991)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」『動詞の自他』ひつじ書房、198-206

早津恵美子(1998)「「知らせる」「聞かせる」の他動詞性・使役動詞性」『語学研究所論集』第 3 号：東京外国語大学語学研究所　45-65

Abduldaev È.(他)　(1987)　*Grammatika kirgizskogo literaturnogo yazïka, Fonetika i morfologiya*,(キルギス標準語の文法　音声学と形態論)　Ilim

Brinton, Laurel J. and Traugott, Elizabeth Closs 2005. *Lexicalization and Language Change*. Cambridge University Press. (日野資成(訳)『語彙化と言語変化』(2009)九州大学出版会)

Kudaybergenov C.(1959) *Kïrgïz tilindegi mamile kategoriyasï*, (キルギス語における関係節のカテゴリー)　Kïrgïz SSR Ilimder Akademiyasï

Matsumoto, Yo (1998) “A Reexamination of the Cross-linguistic Parameterization of Causative Predicates: Japanese Perspectives.” *Proceedings of the LFG98 Conference*

Yudahin, Konstantin Kuz’mič (1965) *Kirgizsko-russkiy slovar’*.(キルギス語・ロシア語辞典)Moskva: Sovetskaya Enciklopediya.

キルギス語の翻字法

Aa=Aa, Бб=Bb, Вв=Vv, Гг=Gg, Дд=Dd, Ее=Ee, Ёё=Yo yo, Жж=Jj, Зз=Zz, Ии=Ii, Йй=Yy, Кк=Kk, Лл=Ll, Мм=Mm, Нн=Nn, Ңң=Ŋŋ Оо=Oo, Өө=Öö Пп=Pp, Рр=Rr, Сс=Ss, Тт=Tt, Уу=Uu, Үү=Üü Фф=Ff, Хх=Hh, Цц=Cc, Чч=Čč, ъ=”, Шш=Šš, Щщ=Šč šč, Ыы=Ïï, ь=’, Ээ=Èè , Юю=Yu yu, Яя=Ya ya

グロスの略号一覧

ABL ablative-奪格；ACC accusative-対格；CAUS causative suffix-使役; DAT dative-与格；GEN genitive-属格；PASS passive suffix-受動接辞; PL plural-複数；POSS possessive-所有形；PRES present/future tense-現在／未来形; PAST past tense-過去形；REFL reflexive suffix-再帰；SG singular-単数; LOC location-位置格; CV converb-～て形；VN verbal noun-動名詞； 1/2/3-1 人称、2 人称、3 人称

注

[1] キルギス語は、アルタイ語族チュルク諸語に属し、キルギス共和国の国語である。キルギス語は文の語順が基本的に日本語と同じように主語―目的語―動詞(SOV)で、目的語や動詞に接辞や活用語尾が付着し、母音調和や子音調和を行うことを特徴とする。